

目次

献辞

山本登朗教授 履歴と業績	1
伝寂蓮筆本系『大江千里集』の考察	17
池田光政筆「古筆臨模聚成」における「貫之集」古筆切三種	35
『和漢朗詠集』の書写と装丁	47
物語類題和歌集の存在——伝二条為忠筆四半切の紹介と検討——	59
藤原為家の私家集書写——素紙・枳形本を中心に——	65
『夜の鶴』と即詠歌	77
『伊勢物語』第五十八段の一端——農作業歌と「すだく」の視点から——	91
『伊勢物語山口記』の現存伝本とその性格	111
『大和物語』の視点——女からの和歌を通して	127
『袖中抄』「ミタラシガハ」注の意図	145

『とほがたり』研究——その独自性——	古谷友香里	155
熊野信仰をめぐる女人蘇生譚	小川路世	175
銭を運ぶ連歌師——日記・紀行文を資料として——	鶴崎裕雄	187
近世大名による和歌の学びと交流——岡山藩・池田綱政と広島藩・浅野綱晟——	福留瑞美	199
桜井松平家と古池跡——古池はいかにして「現れた」か——	三原尚子	221
俳諧時間景情論——蕪村発句の構想——	藤田真一	237
『忠臣規矩順従録』小攷	山本卓	265
『仮名文章娘節用』作品論——恩の視点から——	黒澤暁	275
『古今夷曲集』『後撰夷曲集』の漢字と振り仮名 ——俳諧集との比較を通して——	田中巳榮子	293
横光利一「日輪」論——卑弥呼の人物像に関して——	松山哲士	309
菊池寛の大毎・東日再入社をめぐって	関肇	329
火野葦平「王六郎」論——『聊齋志異』「王六郎」との比較研究——	増田周子	345

今東光『はぜくら』論——戦後日本へのまなざし	齋藤佳子	361
谷崎潤一郎「瘋癲老人日記」論——日記を通じて伝える颯子への思い	猪口洋志	381
国文学会彙報		399
近世初期にみる二体「節用集」漢字字体の規範	徐茂峰	(1)
近世後期江戸における遊里語の行為指示表現	森勇太	(21)
——滑稽本・人情本との対照を通して——		
近世・近代の口頭語資料における時を表す語彙	山際彰	(37)
——狂言台本と落語速記資料を中心に——		
弔辞の人物説明文で用いられる「君」の変遷——新聞・雑誌資料と比較して——	利岡真帆	(55)
依頼場面における許可求め表現の使用の動態	辻岡咲子	(69)
愛媛県宇和島市の方言文末詞「ワ」・「ワイ」	中川寛之	(83)
役割関係からみた〈完成期〉の東西漫才	日高水穂	(99)